声に出して読む万葉集　第四十八回

巻八　其の二

春雑歌　つづき

一四四一

［題詞］　大伴宿祢家持の鶯の歌一首

［原文］　打霧之　雪者零乍　然為我二　吾宅乃苑尓　鶯鳴裳

［訓読］　うち霧(き)らし雪は降りつつしかすがに我家(わぎへ)の苑(その)に　鶯(うぐひす)　鳴くも

▽語釈

霧らし＝霧でくもらせる。

しかすがに＝そうではあるが。

一四四二

［題詞］　大蔵少輔丹比屋主真人(たぢひのやぬしのまひと)の歌一首

［原文］　難波邊尓　人之行礼波　後居而　春菜採兒乎　見之悲也

［訓読］　難波辺(なにはへ)に人の行ければ後(おく)れ居(ゐ)て春菜(はるなつ)摘む子を見るが悲しさ

一四四三

［題詞］　丹比真人乙麻呂(たぢひのまひとおとまろ)の歌一首［屋主真人の第二子也］

［原文］　霞立　野上乃方尓　行之可波　鶯鳴都　春尓成良思

［訓読］　霞立つ野の上(へ)の方(かた)に行きしかば鶯鳴きつ春になるらし

一四四四

［題詞］　高田女王(たかたのおほきみ)の歌一首［高安（天武天皇の子、長皇子の孫）の女(むすめ)也］

［原文］　山振之　咲有野邊乃　都保須美礼　此春之雨尓　盛奈里鶏利

［訓読］　山吹の咲きたる野辺のつほすみれこの春の雨に盛りなりけり

一四四五

［題詞］　大伴坂上郎女の歌一首

［原文］　風交　雪者雖零　實尓不成　吾宅之梅乎　花尓令落莫

［訓読］　風交(まじ)り雪は降るとも実にならぬ我家(わぎへ)の梅を花に散らすな

一四四六

［題詞］　大伴宿祢家持の春の雉の歌一首

［原文］　春野尓　安佐留雉乃　妻戀尓　己我當乎　人尓令知管

［訓読］　春の野にあさる雉(きぎし)の妻恋ひにおのがあたりを人に知れつつ

一四四七

［題詞］　大伴坂上郎女の歌一首

［原文］　尋常　聞者苦寸　喚子鳥　音奈都炊　時庭成奴

［訓読］　世の常に聞けば苦しき呼子鳥(よぶこどり)声なつかしき時にはなりぬ

右の一首は、天平四年（七三二）三月一日佐保の宅にて作れり。

春相聞

一四四八

［題詞］　大伴宿祢家持、坂上家の大嬢に贈れる歌一首

［原文］　吾屋外尓　蒔之瞿麥　何時毛　花尓咲奈武　名蘇經乍見武

［訓読］　我がやどに蒔(ま)きしなでしこいつしかも花に咲きなむなそへつつ見む

▽語釈

なそへ＝甲でない乙を甲であると見立てる。

一四四九

［題詞］　大伴田村家の大嬢、妹（いもうと）坂上大嬢に与ふる歌一首

［原文］　茅花抜　淺茅之原乃　都保須美礼　今盛有　吾戀苦波

［訓読］　茅花抜（つばなぬ）く浅茅（あさぢ）が原のつほすみれ今盛りなり我が恋ふらくは

▽語釈

茅花＝晩春に出るチガヤの花穂。引き抜いて食べた。

一四五〇

題詞］　大伴宿祢坂上郎女の歌一首

［原文］　情具伎　物尓曽有鶏類　春霞　多奈引時尓　戀乃繁者

［訓読］　心ぐきものにぞありける春霞たなびく時に恋の繁きは

▽語釈

心ぐし＝心が切なく苦しい。

一四五一

［題詞］　笠女郎、大伴家持に贈れる歌一首

［原文］　水鳥之　鴨乃羽色乃　春山乃　於保束無毛　所念可聞

［訓読］　水鳥の鴨の羽色（はいろ）の春山（はるやま）のおほつかなくも思ほゆるかも

一四五二

［題詞］　紀女郎の歌一首［名曰小鹿也］

［原文］　闇夜有者　宇倍毛不来座　梅花　開月夜尓　伊而麻左自常屋

［訓読］　闇ならばうべも来まさじ梅の花咲ける月夜（つくよ）に出でまさじとや

一四五三

［題詞］　天平五年（七三三）　癸酉春閏三月、笠朝臣金村、入唐使に贈る歌一首［并短歌］

［原文］　玉手次 不懸時無 氣緒尓 吾念公者 虚蝉之 世人有者 大王之 命恐 夕去者 鶴之妻喚
難波方 三津埼従 大舶尓 二梶繁貫 白浪乃 高荒海乎 嶋傳 伊別往者 留有 吾者幣引 齋乍 公
乎者将待 早還万世

［訓読］　玉たすき 懸けぬ時なく 息の緒に 我が思ふ君は うつせみの 世の人なれば 大君の
命畏み 夕されば 鶴が妻呼ぶ 難波潟 御津の崎より 大船に 真楫しじ貫き 白波の 高き
荒海を 島伝ひ い別れ行かば 留まれる 我れは幣引き 斎ひつつ 君をば待たむ 早帰りませ

▼注釈

天平四年八月十七日、丹比真人広成は遣唐大使に任ぜられ、翌五年閏三月二十六日に節刀を授けられ、四月三日、難波の御津を出発した。三首はその時の遣唐使餞別の宴で詠まれた作と見られる（『釋注』）。

一四五四　反歌

［原文］　波上従 所見兒嶋之 雲隠 穴氣衝之 相別去者

［訓読］　波の上ゆ見ゆる小島の雲隠りあな息づかし相別れなば

一四五五　反歌

［原文］　玉切 命向 戀従者 公之三舶乃 梶柄母我

［訓読］　たまきはる命に向ひ恋ひむゆは君が御船の楫柄にもが

一四五六

［題詞］　藤原朝臣廣嗣、櫻花を娘子に贈る歌一首

［原文］　此花乃 一与能内尓 百種乃 言曽隠有 於保呂可尓為莫

［訓読］　この花の一節のうちに百種の言ぞ隠れるおほろかにすな

一四五七

［題詞］ 娘子の和ふる歌一首

［原文］ 此花乃 一与能裏波 百種乃 言持不勝而 所折家良受也

［訓読］ この花の一節のうちは百種の言待ちかねて折らえけらずや

一四五八

［題詞］ 厚見王（系譜未詳）、久米女郎（くめのいらつめ）（伝未詳）に贈る歌一首

［原文］ 室戸在 櫻花者 今毛香聞 松風疾 地尓落良武

［訓読］ やどにある桜の花は今もかも松風早み地（つち）に散るらむ

一四五九

［題詞］ 久米女郎、報（こた）へ贈る歌一首

［原文］ 世間毛 常尓師不有者 室戸尓有 櫻花乃 不所比日可聞

［訓読］ 世間（よのなか）も常にしあらねばやどにある桜の花の散れるころかも

一四六〇

［題詞］ 紀女郎、大伴宿祢家持に贈れる歌二首

［原文］ 戯奴［變云 和氣］之為 吾手母須麻尓 春野尓 抜流茅花曽 御食而肥座

［訓読］ 戯奴（わけ）［變云 わけ］がため我が手もすまに春の野に抜ける茅花（つばな）ぞ食して肥えませ

▽語釈

戯奴＝人を親しんで言う語。

すまに＝休めずに。

一四六一

［原文］ 晝者咲 夜者戀宿 合歡木花 君耳将見哉 和氣佐倍尓見代

［訓読］　昼は咲き夜(よる)は恋ひ寝(ぬ)る合歓木(ねぶ)の花君のみ見めや戯奴(わけ)さへに見よ

［左注］　右は、合歓の花と茅花(つばな)とを折り攀(よ)ぢて贈る。

▽語釈

君＝主君。自分をいう。

さへ＝副助詞。「添へ」の転と考えられる。「その上…まで」

一四六二

［題詞］　大伴家持の贈り和へる歌二首

［原文］　吾君尓　戯奴者戀良思　給有　茅花手雖喫　弥痩尓夜須

［訓読］　我が君に戯奴(わけ)は恋ふらし賜りたる茅花(つばな)を食(は)めどいや痩(や)せに痩す

一四六三

［原文］　吾妹子之　形見乃合歓木者　花耳尓　咲而盖　實尓不成鴨

［訓読］　我妹子(わぎもこ)が形見(かたみ)の合歓木(ねぶ)は花のみに咲きてけだしく実にならじかも

▽語釈

けだし＝おそらく。たぶん。

一四六四

［原文］　春霞　軽引山乃　隔者　妹尓不相而　月曽經去来

［訓読］　春霞たなびく山のへなれれば妹に逢はずて月ぞ経にける

［左注］　右は、久邇京(くにのみやこ)より寧樂(なら)の宅(いへ)に贈れり。